

日本航空株式会社所属 ボーイング式747型 JA8110

に関する航空事故報告書

昭和49年8月16日

航空事故調査委員会議決(空委調第101号)

| | |
|-------|--------|
| 委員長代理 | 山口 真 弘 |
| 委員 | 諏訪 勝 義 |
| 委員 | 上山 忠 夫 |
| 委員 | 八田 桂 三 |

1. 航空事故調査の経過

1.1 航空事故の概要

日本航空株式会社のボーイング式747型JA8110が昭和49年6月11日同社の定期62便として香港を離陸し東京に向け飛行中、旅客の1名が病死した。

1.2 航空事故調査の経過

6月11日 現場調査

2. 認定した事実及び認定した理由

JA8110は、6月11日旅客153名、乗員34名(運航乗務員12名、客室乗務員22名)が搭乗し、15時29分香港国際空港を離陸し、巡航高度33,000フィートで東京に向け正常に飛行中、沖縄西方約300海里のSLUG付近上空において、16時55分ころ食事サービス中に旅客(45才)が急に苦しみ出して容態が異状となったのを客室乗務員が発見した。

同旅客の二列後にいた外国人医師及び前方の座席にいた外国人看護婦が自発的にかけて、応急手当をしたが回復しなかった。

この間に、客室乗務員から通報を受けた機長は、最寄りの那覇空港に緊急着陸を計画したが、

021001

当該医師の診断によれば、前記旅客の症状は手遅れの状態であり、さらに17時08分ころには当該医師により同旅客の死亡が確認された。

従って機長は、そのまま東京国際空港に飛行を続けることとし、その旨管制機関に通報し、さらに専用周波数で会社に状況を報告した後、同機は19時41分東京国際空港に着陸し、同50分スポット33に入った。

外国人医師の診断によれば、同旅客の死亡の原因は「心臓麻痺」であったが、東京都監察医務院において行われた解剖の結果によれば、死亡の原因は左中大脳動脈瘤破裂によるくも膜下出血であった。

3. 結 論

本事故は、JA8110に搭乗中の旅客が死亡したもので、死亡の原因は左中大脳動脈瘤破裂によるくも膜下出血であった。

021002